↘登録はありませんでした)。いかに解決すべきかが両県の二人の共通の検討事項でした。東京都の衛生部へ何度も二人で足を運んだこともあり、東京都を含めた関東がん登録(仮称)の設立へ向けた活動も行ったりしましたが、成果に繋がることはありませんでした。結局、がん登録の法制化による全国がん登録が立ち上げられ、今日に至って登録の精度は解決されています。その後の三上先生は 5 年相対生存率の考えを一般の方へ周知することを使命とされ、最終的に KapWeb の開発に繋がっていきました。

三上先生のアフター５を思い起こすと、必ず牛タンがメインディッシュでした。そして、その折の話題↗

↘は「利根川流域の高率ながん罹患の原因究明」を一緒に研究しようという内容でした。今思えば、この研究に協力して実施していれば、と悔やまれてなりません。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌(2022/7/24 記)

岡本直幸
Naoyuki Okamoto
日本がん登録協議会顧問

三上春夫先生を偲んで

去る 2022 年 3 月 7 日、三上春夫先生は帰らぬ人となりました。謹んで哀悼の意を表します。

三上先生は 1990 年代の終わりに千葉県がんセンター研究所の予防疫学研究部の村田紀部長の後任として着任されました。同部は千葉県がん登録事業の運営とこれを用いたがんの記述疫学研究を研究テーマの１つとしておられた関係で、当時、JACR の 2 代目理事長の大島明大阪府立成人病センター調査部長が班長をされていた厚労省がん研究助成金「地域がん登録資料の精度向上と活用」班で、ご一緒することになりました。1990 年代の後半から 2000 年代の前半は、個人情報の保護や自己情報をコントロールする権利意識の観点から、患者さんから同意を得ないで機微な情報を自治体が取得、登録する事業に対するメディアや社会の目が大変厳しく、事業やこれを活用した研究の継続がとても苦しい時代でした。ですので、当時の活動を共にしました三上先生とは、戦友のような感覚を抱いております。

三上先生は、ややもすると単調になりがちながんの記述疫学研究に、新しい発想と実用的な視点を取り入れ、2000 年代の初めにはまだ珍しかった地理疫学をがん登録資料の分析に導入されました。肺がん患者の住所地から幹線道路までの距離と、肺がん罹患率との関係性の分析から、肺がん罹患に与える大気汚染のインパクトを明らかにする試みです。これはその後、国立がん研究センターの片野田耕太先生らが、「環境庁 3 府県コホート」を使って大気汚染と肺がんとの関係を明らかにした国内研究に、結果のタイミングとしては先んじていたと言えます。

また、2004 年度から始まった JACR の現理事長である猿木信裕先生が班長を務められた厚労省がん研究助成金「院内がん登録」研究班は、前年度までの岡本直幸班長(JACR 3 代目理事長)からの流れで、全がん協加盟施設のがんの 5 年相対生存率の公表を活動目標に設定しました。その目的は、各施設が各県のがん治療の「お山の大将」に終わることなく、生存率を相対化して日常診療の改善等にフィードバックできるようにすること、および、がん患者が病院を選ぶための客観的情報を得られるようにするという、当時としては画期的な試みでした。↗

↘私はこの研究班では、施設間での生存率の比較妥当性が高まるように、対象症例の条件、予後把握方法と把握率、層別化因子、最小症例数、作表法などの公表に向けたガイドラインの作成を担当しましたが、その素案を検討する班会議(台風が来た 2004 年 10 月の横浜のホテルで)三上先生らとともに熱い議論を交わした記憶が蘇ります。そして、この事業が軌道に乗りました後は、皆様もご存じの通り、三上先生が開発されました「KapWeb」という解析ソフトにより、指定した条件の生存率が、オンライン上で全がん協の生存率算定用データを用いて自動算出、閲覧できるようになりました。
https://kapweb.chiba-cancer-registry.org/notice

三上先生は、がんのコーホート研究にも精力的に取り組まれました。2005 年から始まった、日本多施設コーホート研究(J-MICC研究)に千葉サイトとして参画され、１万人以上の千葉県民のリクルートに成功されました。私は 2010 年度から 6 年間主任研究者をしました関係で、三上先生が参加者をリクルートする現場を見せていただく機会がありました。住民の方に大変分かりやすく、上手に研究参加を呼び掛けておられ、参加率が他のサイトに比べて高い理由がよく分かったことを、大変懐かしく記憶しております。

三上先生が青森のご実家で倒れられた時や、その後長期間治療で休まれた間や復帰後も、千葉県がんセンター研究所の永瀬浩喜所長(当時)に、三上先生の J-MICC 活動や JACR の理事としての活動を支えてくださいましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。残された私たちがん登録・公衆衛生分野の関係者は、三上先生の分まで世の中が少しでも明るくなるよう、努めていこうと思います。

田中英夫
Hideo Tanaka
日本がん登録協議会顧問